

中学校国語科における思考力育成のための授業実践研究

－思考力・判断力・表現力の活用を通して－

高知大学大学院 教育学専攻 授業実践コース (国語教育分野)

高知市立青柳中学校 教諭 岡本みゆき

1 はじめに (問題の所在)

知識基盤社会の到来や、グローバル化の進展など急速に社会が変化する中、時代を担う子どもたちには、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや、変化に対応する能力や資質が一層求められている。一方、国内外の学力調査の結果などから、我が国の子どもたちには思考力・判断力・表現力等に課題がみられた。2007年に改正された学校教育法において、①基礎的・基本的な知識・技能 ②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等 ③主体的に学習に取り組む態度など、学力の重要な3つの要素が示されている。2008年1月17日に提出された中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、国語科における学習指導について具体的な目標を、①言葉を通して的確に理解する能力の育成、②論理的に思考し表現する能力の育成、③互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力の育成、④我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむこと、と示されている。

平成20年改訂の学習指導要領では、「思考力・判断力・表現力の育成」「言語活動の充実が」が強調されている。国語科では特に「論理的に思考する能力」や「論理的に表現する能力」の育成が重要視されている。しかし、これまでの学習指導要領では、育成すべき思考力がどのようなものであるか明確にされず、学校現場に委ねられている現状もうかがえる。また、各教科等の特質に応じた言語活動から育成する思考力等には、国語科で育成する思考力と重なる面もあり、国語科では何を最も重視すればいいのかという疑問も生じ、「思考力」「論理的思考力」の育成について、効果的な授業研究が重要と考える。

2 研究の目的(方法)

国語科教育における「思考力」の育成について、指導者側がどのように意義を考え、目標や授業方法を考えていけばよいのか、さらに、学習者側にとっても充実した学習の場となり、「思考力」を育成する授業実践にするにはどのような工夫が必要か、といった課題から、次の4点を中心に研究を試みた。

- ①国語科教育で育成する「思考力」について先行研究より考察し、重要視される「論理的思考力」の考察を行う。
- ②中学校学習指導要領国語における「思考力」について考察を行う。
- ③先行研究である授業実践事例から、教材・学習課題、授業方法・指導の工夫、育成される「思考力」「論理的思考力」の考察を行う。
- ④授業実践研究から、「思考力」育成に有効な、教材開発や授業方法はどのようなものか明らかにする。
高知大教育学部附属中学校1年生、高知市立青柳中学校1年生を対象に授業を計画実施しその結果を分析し考察を深める。

3 研究内容

以下(1)～(5)に、序章と終章を除く修士論文第一章から第五章について、研究概要をまとめる。

(1)第一章 国語科教育における「思考力」について先行研究の考察

「思考」「思考力」の育成・「論理的思考力」の育成について、先行研究の考察から、各研究者によって整理の仕方や定義の仕方が異なり、国語科教育全体の共通定義がなされていないことが明らかになった。そこで、まず先行研究より、国語科教育において育成する思考力について、『国語教育研究大辞典』

『教育心理学事典』や、辰野千壽氏の学習心理学研究、井上尚美氏の言語論理教育入門を中心に思考の定義や分類についての考え方を概観し、安藤修平氏の指導論から、思考の基本条件をまとめた。

その結果、思考の型には重なりあっているものもあり、厳密に区別することができないとも考えられた。実際、問題解決においては、様々な思考が同時に働くことが多く、教師は、どのような働きかけをすればどのような反応が返ってくるかを考え、思考を操作的に扱っていくことが大切である。思考操作を、子どもたちに活発化させ、思考力として育成させるために、教材研究や授業作り・発問・評価などを考えることが重要となった。

また、この思考操作は国語科の授業だけで行うものではなく、全ての学習において養われると考えられる。しかし、実際の教科書教材には、説明的文章・文学的文章・漢字や語句・文法など種々な内容があり、どの単元や教科書教材で、どのような思考力の要素や観点を中心にすればよいのか、国語科授業で扱う単元や教材に応じて、育成したい思考力の要素として、明確に示し系統だてることが必要となった。

(2) 第二章 中学校学習指導要領国語における「思考力」の考察

今日の日本が求める学力は、知識や技能の習得のみでなく、それを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等、そして学習意欲に変わってきており、現代の子どもたちに特に求められる能力だといえる。これは、現代の日本における学力観の転換が求められると同時に、教育活動に従事し授業実践をしてきた教員の意識改革が求められているとも考えられる。中学校国語科で扱う単元や教材に応じて、育成したい思考力の要素について、学習指導要領ではどのように位置づけられてきたのか、戦後 8 回にわたる学習指導要領の改訂から、その特徴を概観し中学校学習指導要領国語における「思考力」について考察することにした。

その結果、特に「思考力」の育成については、昭和 33 年改訂の学習指導要領で強調された経緯があった。人間形成や生活の充実、文化や社会の発展をめざすなかで、思考力の育成が必要とされ認識され始めた時代であった。昭和 44 年改訂では「思考力」を言語の技術や能力育成として重要視されていった。さらに、昭和 52 年改訂の学習指導要領国語では、体系化を推し進め能力重視の方向に進んだにもかかわらず、「思考力」という具体的表記は、表面上姿を消し、学習指導要領において「思考力」育成の位置づけがあいまいになっていったとも考えられた。平成元年改訂では、再び国語科の目標の中に「思考力」育成について明記されている。また、平成 10 年改訂では、「思考力」の前に「伝え合う力」が位置づけられていた。言語を知的活動の基盤とともにコミュニケーションや感性・情緒の基盤ととらえ「生きる力」の育成が教育に求められた。この「生きる力」の大前提に「思考力」を位置づけ、平成 20 年改訂では、「思考力・判断力・表現力の育成」「言語活動の充実が」が強調されている。しかし、国語科における「思考力」とはどのようなものか、どのように指導し、どのような思考力を育成していくのか明確に示されておらず、「思考力」の育成について、効果的な授業研究が重要となってきた。

(3) 第三章 国語科教育における「論理的思考力」の必要性

国語科教育における「論理的思考力」の必要性について、『中学校学習指導要領解説国語編』（平成 20 年 9 月）や、『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力の育成に向けて～』【中学校版】（文部科学省平成 24 年 6 月）を中心に考察を進めた。

『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力の育成に向けて～』【中学校版】では、言語活動を実施する場合にも、生徒の発達段階に配慮する必要がある、「帰納・類推、演繹などの推論を用いて説明し伝え合う活動を行う。」「問題を解決するため、学習の見通しを立てたり」「根拠に基づいて考えをまとめ報告書を作成」「内容を比較したり、批判的に捉えたり」といった点を重視する必要があるとされている。この部分には「推論」「比較」「批判的」といった、これまで『学習指導要領』では明確にされてなかった、国語科で育成する「思考力」の要素や、言語活動を通して育成する国語科の言語能力の方向性が示されていると考えられる。「言語活動」を充実させるには、授業において様々な手法や活

動が取り入れられ、その方法や有効性が研究されているが、それと同時に、発達段階に応じて、どのような「思考力」が育成されるのか、その学習活動の有効性を明確に実践研究する必要もある。

そこで、学校現場に求められる思考力や子どもの実態について、井上尚美氏や岩永正史氏の先行研究からまとめ、国語科における「論理的思考」「論理力」について、荒木茂氏、井上尚美氏、小田迪夫氏、桜本明美氏、難波博孝氏の先行研究を挙げ考察を進めた。また、国語科で育成する「論理的思考力」の要素については、西郷竹彦氏や浜本純逸氏の先行研究から考察を進めた。

「思考力」の育成は、国語科だけで育成されるものではなく、「どんな思考力を育てたいか」、学校現場では、学校教育目標に基づき、思考力の中でも取り上げたい要素をまとめて、中核となる思考力を設定し、それらを支える具体的な思考の要素とともに指導していくことが求められている。各学校が発達段階ごとに、生徒の学力が発達する過程をどのように把握し、どのように学習指導に組み込むかなど、観察や実験的手法による研究が必要であること、国語科で育成する「論理的思考」の整理統合など、さらなる今後の研究考察の方向や課題が示された。

(4) 第四章 中学校国語科における論理的思考力育成のための授業実践事例の考察

先行研究である授業実践事例から、教材・学習課題、授業方法・指導の工夫、育成される「思考力」「論理的思考力」の考察を進めた。先行研究である授業実践事例9冊を概観し、その特色を考察し研究の対象をしぼり、特に『論理的思考を鍛える国語科授業方略【中学校編】』（編者 井上尚美・大内善一・中村敦雄・山室和也 溪水社 平成24年3月3日）を中心に、考察を試みることにした。本章では、二つの実践事例を中心に考察を行い、育成される「論理」・「論理的思考」の概念においては、安芸高田市立向原小学校の研究の12の定義（『思考力を育てる「論理科」の試み』井上尚美・尾木和英・河野庸輔・安芸高田市立向原小学校編 明治図書）を参考にしてみた。しかし、論理的思考の概念には、多様な関係の種類・思考の種類・要素等が考えられ、明らかではなく決定的ではない。これらの要素が螺旋的に重なり合って育成され、それに伴い多くの思考操作が行われていると推測される。そのため、各学校が発達段階をもとに、学力が発達する過程をどのように把握し、思考力育成をどのように学習指導に組み込むか、観察や実験的手法による授業実践研究が重要であり、次章の実践研究につなげることとした。

(5) 第五章 中学校国語科における思考力育成をめざした授業実践研究

－思考力・判断力・表現力の活用を通して－

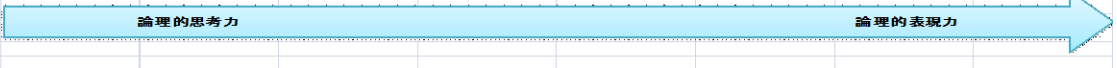
第一章から第四章までの研究をもとに、思考力の要素の整理・統合を試案し、思考力の構造化を中学1年生段階、中学2年生・3年生段階と系統化を試みた。これを踏まえて、「中学校国語科における思考力育成をめざした授業実践研究－思考力・判断力・表現力の活用を通して－」授業実践研究Ⅰ，Ⅱ，Ⅲを試み、分析・考察を行った。以下それぞれの概要をまとめ、授業実践研究では、実践研究Ⅱを中心に報告する。授業実践Ⅱは中学1年生1学期（6月）に全クラスの生徒を対象に実施したもので、中学校へ入学したばかりの生徒達の、思考力育成のための導入段階での試みたものである。

ア 思考力の要素の整理・統合と思考力の構造化

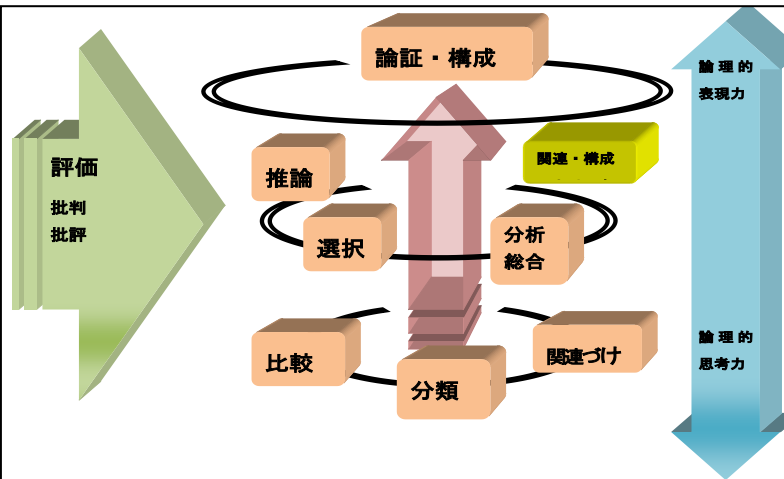
国語科で育成する「思考力」や「論理的思考力」の要素・種類を、筆者なりに整理・統合し、今後の授業実践研究に活用したいと考え、「中学校国語科で育成すべき思考力の構造」（試案）、「構造化」（試案）を試みた。【資料1】では、「思考力」の要素・種類として、「比較」「分類」「関連づけ」「分析・総合」「選択」「推論」「論証・構成（説明・説得）」「評価」として、要素の定義、能力の具体化を試案し、中学校学習指導要領国語科と照らし合わせて関連した語彙を挙げた。さらに、中学1年生段階と中学2年生・3年生段階で取り組むべき重点指導をまとめた。これは、安芸高田市立向原小学校の実践を参考に、筆者が試案したものである。（『思考力を育てる「論理科」の試み』井上尚美・尾木和英・河野庸輔・安芸高田市立向原小学校編 明治図書）

【資料1】中学校国語科で育成すべき思考力の構造（試案）

安芸高田市立向原小学校の実践を参考								
思考力の要素・種類（試案）	比較	分類	関連づけ	分析・総合	選択	推論	論証・構成（説明・説得）	評価
要素の定義	複数の事柄を対置させ、その共通点や相違点を列挙していく力	複数の事柄のある共通項に基づいていくつかの組に分ける力	主産・仕組み・内容・表現形式等の組み立てを思考する力	あるものを分解して、それを成立させている成分・要素・側面を明らかにしていく力	ある観点から詳しく調べ、適当なものを選び出す力	物事を組織する力 帰納的、演繹的に考える力	複数の要素を組み立ててあるものをつくり出す力 既集した情報等を筋立てて組み立てることができる力	そこに表されていることが、果たして現実と照らし合わせて適当なものであるかどうかの適合性について判断する力（「本当にそうかな？」と見直す力）
能力	複数の事柄間の共通点や相違点を列挙し、それぞれの特徴をとらえることができる。	複数の事柄を様々な観点をもとに分類し、それぞれの内容ごとの特徴をとらえることができる。	-構成や展開、表現の特徴を捉え、内容の理解に役立てる。 -描画の展開や登場人物などの書きを捉え、内容の理解に役立てる。	複数の観点から考え、物事の成り立つ条件を考慮することができる。	相手や目的・場面などに応じて、適切な情報を調べたり取り出すことができる。	共通する事柄から規則性を見いだしたり、規則性を具体的な出来事に応用してその結果を推測したりすることができる。	-考えや根拠や事柄の内容を明確に表す力。 -相手の理解を深め、納得させる力。 -一つの事柄を課題として捉え、次のその解決のための考え（仮説）をだし、さらにその正しさを調べてみる。（検証・実験・調査）という順序で論を進めていく力。	情報について批判的に考え、その妥当性、適合性を明らかにすることができる。
中学校学習指導要領国語と関連した語彙	-何を比較させるのか -文章の中心部分と付加部分 -文章の事実と意見 -文章の構想と心情 -筆者（作者）と自分 -自分・他者 -少数と多数 -文章と文章 -段落と段落 など	-共通点・相違点	-段落相互の関係 -文章の論理的な構成や展開 -相互関係や順序関係 -語句や文の使い方 -表現の効果	-全体と部分の関係を把握 -目的や必要に応じて要約したり、要旨をとらえる -自分の考えをまとめる -表現の効果	-取材 -文章の形態を選択	-考えを広げ、深める	-自分の考えや意見 -報告や紹介 -対話や討論 -説明や発表 -ヒューズ -展開の工夫	-鑑賞 -文読 -批評 -自分の意見を持つ
関連した語彙	類比・対比	観点・区別	理由・原因・根拠・結果・筋道・順序・関連 対・関係づける	部分・全体・特徴 具体と抽象	選択・検討・判断	類推（帰納・演繹）	理由・原因・根拠・筋道・順序・説明・説得 主産・考え・意見	批判・主観・客観
重点指導	中1							
	中2・中3							



【資料2】中学校で育成すべき思考力の構造図（試案）



【資料2】は思考力の構造を、発達段階に即して、積み上げていくとともに、螺旋的に繰り返し指導する必要があると考えて、構造図にしてみた。

これは、西郷竹彦氏が『文芸・教育全集 第四巻 教育即認識論』（恒文社 1996年5月）「発達段階に即して、レンガを積み上

ていくような形に指導も段階的になっていった。これで合理性があるし、

少の手直しはしても実践的にやりやすいと思う。……省略……

「比較」をやってそれから「順序」や「理由」「条件」をだんだんとやっていくのではなくて、一年生から、全部指導する。全部というところがちょっと言い方がおおざっぱだけれど、一年生から優しい形で「類比」も「対比」も「条件」も「仮定」も「構造・関係」も、素朴な優しい形で指導する。二年三年になったら、今度は少し程度の高い形です。二つの見方を組み合わせて、らせん上に高まっていく。」と述べていたことから、筆者自身もその考えを実践現場に導入したいと考えたからである。

思考力には「論理的思考力」と「直感的思考」（発想する力）（観点）といった考え方もある。今回試みた思考力の要素の整理・統合と思考力の構造化は、「論理的思考力」を中心にまとめている。さらに、思考力の要素・種類に「評価」をとり入れた。評価する能力は思考の要素を全体的に包括的にとらえることが必要となってくると考えたからである。さらに、発達段階に応じた学習活動で育成した思考力を駆使しながら、学習活動をメタ認知させるために必要であると考えている。そして、育成した「思考力」を活用し、感じたり考えたりしたことを、自分の言葉や意見として「表現力」につなげることが重要だと考え、授業実践研究を進めた。

イ 授業実践研究Ⅰ

思考力育成のために、生徒自身が「感じる活動」「考える活動」を通して、鑑賞文を書くという単元を取り上げた。単元名は教科書教材「感じたことを文章にしよう」（『国語1』光村図書）をもとにして、高知大学附属中学校1年生○組，△組で2012年12月に全3時間計画で実施した。感じたり考えたりしたことの根拠となるものを自分で探し、構成を考えながら言葉や文章で表現する活動は、論理的な思考力や表現力の育成につながると考えたからである。

研究仮説を

- ①生徒に興味関心を持たせるような具体物を使用すれば、授業への意欲が喚起され、思考を促すことにつながる。
- ②自分の意見を書き出させ、グループ活動をとおして、ある観点からまとめさせる活動をすることが、思考力をはたらかせることにつながる。
- ③思考過程が可視化できるワークシートや教材を工夫し、鑑賞文を書かせることによって、比較・分類・関連づけといった思考活動が活発になる。

として、研究を進めた。さらに、学習目標を明確にして様々な活動を仕組むことで、どのような教材や学習活動が、思考力育成のために有効にはたらくのか考察をすすめた。その結果、この研究仮説は有効であると考えられ実践研究Ⅱにも取り入れた。

ウ 授業実践研究Ⅱ

学習者の思考力育成とともに、身につけた知識や技能を活用して、自分の意見を言葉や文章で表現する学習活動をどのように授業に設定するか、また、評価・批評といった学習活動をどのように取り入れるかといったことを中心に、教材開発や授業構想の研究を試みた。教科書教材「ダイコンは大きな根？（稲垣栄洋）」（『国語1』光村図書）をもとに、単元名「学びをひらくⅡ－野菜の不思議発見－」とし、筆者の勤務校である高知市立青柳中学校1年生全クラスを対象に、2013年6月、全9時間の授業計画で実施した。実践研究Ⅰで成果のあった仮説①～③を授業実践の柱とし、新たに「④単元を基本学習・応用学習・発展学習で構成し、発展学習において評価活動を取り入れること。」を加え、単元を通して身につけた知識や技能・思考力を活用させる場を設け、思考力の育成につなげたいと考えた。（*本稿では、紙面の都合上概要であるが、詳細は修士論文第五章第三節にて報告する。）

(7) 単元の目標

【指導目標】

- 身近なものについて説明された文章を読むことを通して、興味関心をもって内容を的確にとらえ理解させる。（価値目標）
- 目的や意図に応じ、必要な情報を読み取り、伝えたい事柄について、構成を考えて書く力を育成する。（技能目標）
- 身近なものについて説明された文章を読み、新しい知識を得たり、自分の考えを広げようとする態度を養う。（態度目標）

【育成したい思考力】

- ①自分の意見と友達の意見を比較・分類することで、それぞれの観点や特徴、内容をとらえる力。
- ②文章と文章、段落と段落を比較して読み、それぞれの特徴から役割をとらえ、関連づけながら文章全体の構成をとらえる力。
- ③課題に沿って文章を読み、目的や意図に応じて引用したり、構成を考たりしながら表現する力。

(イ) 授業計画

数字は時間数		単元「学びをひらくⅡ」
基本 4	一次	教科書教材の題名である「ダイコン」の実物から、疑問や不思議を見つける。
	二次	教科書教材の文章の内容と、自分たちの疑問を比べながら読む。文章中にある筆者の「問い」と「答え」を探す。
	三次	段落の役割や段落の分け方を考えながら、文章中にある筆者の「問い」に対する「答え」をとらえ、まとめる。
応用 2	四次	イチゴの実物を使って、イチゴに対する疑問や不思議を見つける。KJ法を使って、グループ活動を行い、グループで出された意見をまとめて発表する。
	五次	稲垣栄洋氏の『身近な野菜のなるほど観察記』から、イチゴについて書かれた文章を読む。自分たちのみつけた疑問と比較しながら読む。筆者の「問い」と「答え」を見つける。
発展 3	六次	筆者の別の文章（野菜）を選び、「問い」と「答え」を中心に、友達にわかりやすく伝える新聞をつくる。新聞を書く「野菜」を決めて、資料を読む。ペアやグループで同じ野菜を選び、相談しあいながら、個人で新聞1枚を作成する。
	七次	グループで新聞を交換し、コメント（感想や評価）を付箋紙に書き、交換する。自己の学習の振り返りを行う。

(ウ) 思考力育成に関する成果

a 学習者の実際および生徒作品（新聞）からの考察

できあがった新聞は、問いと答えを引用してまとめるというパターンが多かった。文章を全て読みとることが困難な生徒や、書くことを苦手とする生徒もいるが、引用したい部分は自分なりに決めており、教師の簡単なアドバイスで、書こうとする生徒の姿がみられた。ほとんどの生徒が「問い」「答え」を3つ～5つ程度引用してまとめており、資料から絵やイラストを描いたり色をつけたり、工夫を凝らしている生徒も多く、まとめや自分の感想を数行書き加えている生徒もいた。このような様子から、身近な野菜に対する漠然とした知識やイメージが、魅力的な筆者の文章（資料）と繊細で緻密な挿絵によって、生徒が興味関心もち、学習課題に対する意欲が喚起されたと考えられる。教科書教材から発展した同筆者の別の文章は、学習につながりをもたせた学習活動の意欲喚起に有効であったと考えられる。このような実態から学習成立の要件として

- ①生徒にとって身近な例であり身近な不思議であること。魅力ある教材や資料提示となったこと。
- ②指導過程の段階的で発展的な構想から、学びのゴールへの具体的な見通しをもたせたこと。
- ③発展的な教材や、手引き・モデル、ワークシートは学習の見通しを具体的にさせる。
- ④ペアやグループ活動による学びの交流が、他者意識につながり、自分の学びをメタ認知させる。交流しながら、学び方を学んでいること。
- ⑤創造的な要素を取り入れた活動の場の設定。

といった点が考えられ、本実践研究ではそれらが効果的にはたらき、成果につながったと考えられる。

b 目標達成に関する考察—育成したい思考力①②③について

①自分の意見と友達の見解を比較・分類することで、それぞれの観点や特徴、内容をとらえる力。

一次の題名読み「ダイコン」の実物から疑問や不思議を意見交換する学習活動や、四次の「イチゴ」の疑問や不思議を見つけるKJ法によるグループ活動において生徒たちは、比較・分類・関連づけといった思考力をはたらかせ、思考が拡散から収束に至ったとも考えられる。このことは、思考が活発化し、思考力育成に効果的であったと考えられる。

②文章と文章、段落と段落を比較して読み、それぞれの特徴から役割をとらえ、関連づけながら文章全体の構成をとらえる力。

二次・三次・四次において、段落の役割を考えることや、筆者の「問い」や「答え」をとらえる際も、自他の意見を比較したり、段落と段落・文章と文章を比較・分類し、関連づけたりしながら文章の特徴をとらえようとしていた。また、ワークシートや資料を生徒が活用しながら、意見発表が積極的に行わ

れ、学習活動が意欲的であった。新聞作りにおいては、生徒達は文章の特徴をとらえ、「問い」「答え」をみつけながら線を引いている姿がみられた。これらの活動によって思考力が育成されたと考える。

③課題に沿って文章を読み、目的や意図に応じて引用したり、構成を考えたりしながら表現する力。

生徒の新聞から考察すると、新聞の紙面は筆者の「問い」「答え」の部分を引用しているパターンが多い。例えば、「トマト」について書かれた筆者の文章では「トマトが一年中赤い理由」（『身近な野菜のなるほど観察記』（稲垣栄洋 草思社 P89）と副題がつけられているが、生徒の新聞では、新聞のタイトルを「トマト不思議新聞」「真っ赤に染まったトマト」といったように、筆者の文章（資料）の特徴をとらえながら考えて書いていた。また、資料の文章から引用している生徒は多いが、どの部分を引用するか、どんな見出しが適切で、読者をひきつけるのか、といった思考が見られる。さらに、新聞の内容をみると、トマトの赤い理由について多くの生徒が資料から引用しているが、生徒達のつけた小見出しでは「トマトが赤い理由は？」「トマトはなぜ赤い？」と、それぞれ工夫していることがわかる。このように、相手にわかりやすい文章をどのように書けばいいのか、興味関心をもった部分のどこを選択するか、どのように引用するか、新聞の構成を考えながら文章を読み取り、表現するといった活動が行われていた。生徒作品の事例から、資料に載っていないイラストや説明を付け加えたり、感想を書いたりしている者もいた。この活動によって思考が活発化していることが推測される。また、目的意識をはたかせ、思考・判断しながら読み取ることで、表現する力も育成されていると考えられる。

C 成果と課題

生徒の学習の振り返り（自由記述）で印象に残った学習について一番多かった意見が、「新聞を書いたこと」である。その理由のほとんどが「楽しかった」であり、「大変だったけど楽しかった。難しかったけど一生懸命がんばれた。みんなに見やすく工夫したこと。考えながら書いたこと。」といった記述が多かった。思考力育成には、身につけた知識や技能を活用しながら表現活動や評価活動につなげる単元学習が非常に効果的だと考えられる。

エ 授業実践研究Ⅲ

実践研究Ⅰ、Ⅱで有効であった、仮説①～④は同様に授業構想の柱とし、さらに以下3点を具体的に取り入れ実践を行った。

①生徒の日常生活、社会生活に関連した「実の場」となる、具体的な学習活動を設定する。

②身につけた知識や技能を活用した表現活動の場につなげる。

③評価活動を含めた、基本学習・応用学習・発展学習となる単元（授業計画）の構想。

単元名は、教科書教材「項目を整理して伝えよう―案内文を作る」（『国語1』光村図書）で、全4時間計画である。本単元（題材）では、事柄・目的・相手に応じて項目を立て、実際に自分たちで案内文を作るという学習を設定した。事柄・目的・相手に応じて、何をどのように伝えるべきかを考える力を活用し、実際に案内文を作るという学習から、実生活に生きてはたらく書く力を育成したいと考え試みた授業実践研究である。

4 研究の成果と課題（今後の研究と課題）

以上の研究では、先行研究による理論研究、「思考力」を中心に学習指導要領の変遷から教育の歴史的研究、授業実践事例の考察、授業実践研究を行った。中学校国語科で育成すべき思考力の要素とはどのようなものであるか、また、どのような教材や授業構想・授業方法が有効であるのか、研究は途上である。今回の授業実践研究では、説明的文章や文学的文章といった具体的な教科書教材を基本とした研究が不十分である。国語科の特徴である、読む・聞く・話す・書くといった領域や、文法や言語事項の学習、話し合い活動やコミュニケーション活動からも、思考力の育成は図ることができると考えている。さらに、今後は生徒自身がメタ認知できる評価活動を学習に取り入れることも重要となっている。本研究では第5章

で試案した思考力の構造化を基に、各学年の年間計画や学期ごとのカリキュラム構築の研究が不十分で、学校現場の教育目標や研究の方向性に照らし合わせた検証や考察に課題が残っている。

国語科教育における「思考力」の育成について、どのような教材や課題が子どもたちの思考を生み出し、どのような学習活動が思考を賦活させ、授業に対する意欲喚起につながるのか、自分自身が本研究に問題意識をもち続け、日々の授業実践を重ねていきたい。